

〔八丈島特産園芸作物における生産振興技術対策〕  
新規導入を目指したレイ・プランツの生育特性の把握と施設栽培技術  
～オキナワウラボシの定植方法と時期の検討～

中田亜由美・菊池知古  
(島しょセ八丈)

---

【要 約】オキナワウラボシの葉を1枚つけた長さ20cmの地下茎を5, 9, 1月に定植した場合、5月定植で初期生育が最も優れ、1ヵ月後には株あたり1枚の葉が発生し、3ヵ月には100%活着、6ヵ月後には7枚/株収穫できることがわかった。

---

【目 的】

オキナワウラボシ (*Microsorium scolopendria* Copel. 以下、ウラボシと略) はレイ・プランツの新品目として期待されているとともに一般切葉としての出荷も期待される地下茎は島内で栽培されているレザーファン同様に横に伸び、これを分けて定植することで増殖するのが適当と考えられる。本試験では定植時期の違い、および地下茎(根茎)の葉の有無が初期生育に与える影響を明らかにし、ウラボシ栽培の基礎資料を得る。

【方 法】

ウラボシの約20cmに調整した地下茎に葉1枚つけたものと葉を除去したもの(以下、葉有り区および葉無し区とする。図1)を、5月16日、9月11日、1月23日(以下5月、9月、1月)に、遮光率34%の青色ネットを内張りした無加温ビニルハウスに定植した。栽植方法は畝間25cm、株間30cm、深さ1cmとし、施肥は定植後1ヵ月後に、IB化成を株あたり3.75g施用した。供試株数は各区34株とし、定植1ヵ月後に発芽数、3ヵ月後に活着状況、6ヵ月後に収穫数を調査した。

【成果の概要】

1. 5月、9月定植では定植1ヵ月後に地下茎から出芽がみられたが、11月定植では葉の発生がみられなかった。葉有り区の葉柄数は5月、9月ではほぼ同等となったが、葉無し区では違いが見られ、9月は5月の2倍の出芽となった(表1)。
2. 定植3ヵ月後の活着率は、葉有り区は葉無し区と比較して、各月とも活着率が高かった。葉有り区の5月、9月は100%活着し、1月で88.2%となった。これに対して葉無し区は100%活着した処理月はなく、5月の94.1%が最高であった(表2)。
3. 定植6ヵ月後、葉有り区で出荷規格に適合する収穫葉が認められたが、定植時期により枚数は異なった。葉無し区ではほとんど収穫できなかった。5月定植の葉有り区では、70%が出荷規格に適合するものとなり、株あたり3.7枚、Mサイズの葉を収穫することができた(図2, 図3)。
4. まとめ: 地下茎に葉を1枚付け20cmの長さに調整したウラボシは、5月定植で初期生育に優れ、1ヵ月後には株あたり1芽を確認し、3ヵ月後には100%活着、6ヵ月後には株あたり7枚収穫できることがわかった。これに対して9月および1月定植は、葉柄の発生が少なく、定植6ヵ月後の収穫数はわずかであった。葉無し区は9月以外いずれの時期とも葉有り区より生育が劣った。最適な定植時期を把握するには、さらに定植時期を細かく検討する必要がある。



図1 オキナワウラボシの定植苗(左：葉無し 右：葉有り)

表1 オキナワウラボシ定植1ヵ月後の出芽数<sup>a</sup>

試験区	5月定植	9月定植	1月定植
葉有り	0.9	1.1	0.0
葉無し	0.8	1.6	0.0

a)個/株

表2 オキナワウラボシ定植3ヵ月後の活着率<sup>a</sup>

試験区	5月定植	9月定植	1月定植
葉有り	100.0	100.0	88.2
葉無し	94.1	88.2	82.4

a)活着率(%) = (活着株数/定植株数) × 100

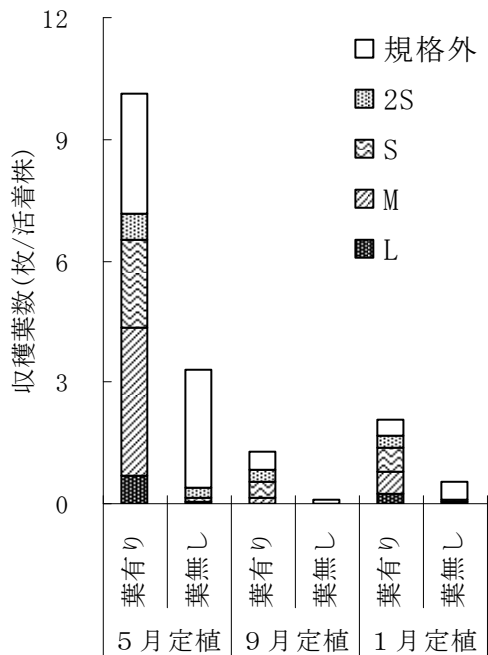


図2 オキナワウラボシ定植6ヵ月後のサイズ別収穫葉数<sup>a</sup>

a)規格は葉身長で区分した。

L : 30~35cm, M : 25~30cm,

S : 20~25cm, 2S : 15~20cm,

規格外 : 15cm未滿)



図3 5月定植の6ヵ月後の株の様子  
5月定植 左：規格外 右：Mサイズ